

「空き家活用ではなく、実際にそ

の家で暮らしているばあちゃんがおられるんですよ」

保育園園長の村上千幸さんに案

内されて、熊本市植木町岩野地区へ。農村部に開かれた住宅街の小

径を一本入ったところに、田んぼと畑、広い庭と納屋のある「ばあちゃんち」が現れた。

植木町は熊本市中心部へ勤める人びとのベッドタウンでもある。

「ばあちゃんち」は、新興の住宅地で孤立しがちな子育て世代を支援しようと、保育園や老人クラブ、民生委員、食生活改善グループなど約40人が連携する「山東子育て応援団」の活動から生まれた。

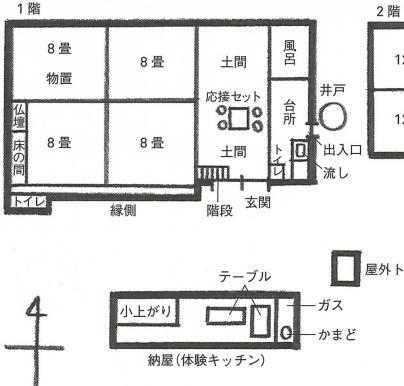
その一員である村上千さんは言う。「本当の子育ては、地域の人と人とのつながりのなかでこそできるのではないかでしようか。介護支援、子育て支援を切り離して考えるのではないでしようか。介護支援、子育て力を見てためには親の生活力が育たなければなりません。まことに『ほん

そのためにともに汗を流し、同じ釜のめしを食べる実践の場が必要でした。子育て力を育てるためには親の生活力が育たなければなりません。まことに『ほん

そのためにともに汗を流し、同じ

釜のめしを食べる実践の場が必要でした。子育て力を育てるためには親の生活力が育たなければなりません。まことに『ほん

大家族を思い出す「地域の家」



「これは何の豆かわかるね?」と、
納屋で平山尚信さん。「これは、君
たちがまんじゅうに入れたあんこを
つくる小豆のサヤよ」

視察者に有償で提供される食事の
食材にもなり、毎月第3土曜日に
開催されるフリーマーケット「く
まちやん市」でも販売される。そ
うした収益も、「ばあちゃんち」の
活動資金となっている。

夏の視察のお客さんにはキュウ
リやナスばかりのお膳を出しま
す。そのときの匂のものを、いか

ばあちゃんも見違えるほど元気に

「空き家活用ではなく、実際にそ

の家で暮らしているばあちゃんがおられるんですよ」

保育園園長の村上千幸さんに案

内されて、熊本市植木町岩野地区へ。農村部に開かれた住宅街の小

径を一本入ったところに、田んぼと畑、広い庭と納屋のある「ばあちゃんち」が現れた。

植木町は熊本市中心部へ勤める人びとのベッドタウンもある。

「ばあちゃんち」は、新興の住宅地で孤立しがちな子育て世代を支援しようと、保育園や老人クラブ、民生委員、食生活改善グループなど約40人が連携する「山東子育て応援団」の活動から生まれた。

その一員である村上千さんは言う。

「本当の子育ては、地域の人と人とのつながりのなかでこそできるのではなく、さまざまな年代の人たちが頼り頼られる関係をつくる。

そのためにも汗を流し、同じ釜のめしを食べる実践の場が必要でした。子育て力を育てるためには親の生活力が育たなければなりません。まことに『ほん

そのためにともに汗を流し、同じ

釜のめしを食べる実践の場が必要でした。子育て力を育てるためには親の生活力が育たなければなりません。まことに『ほん

ひとり暮らしのばあちゃんちを地域の子育て支援拠点に

熊本市植木町・地域交流サロン「ばあちゃんち」

文=森千鶴子（フリー記者） 写真=今岡昌子



「こんな古家でもみなさんに役立ててもらえる。ご先祖様が残してくださいましたおかげです」



太田隈フジエさん（左）。この部屋は昔、板張りで蚕棚を置いていました。人は棚と棚の間に寝よったです

まごとができる場所がほしかったのです」

そのための畑付きの空き家を探していたところ、やはり応援団の一員である福島敦子さんに紹介されたのが、太田隈フジエさん（82歳）の家だった。福島さんが言う。「ばあちゃんちにはときどき様子を見に行つていました。農業で3人の息子さんを育て上げ、今は、それぞれ所帯を持つておられます。ひとり暮らしでは今の家は広すぎ、庭も畑も手入れが大変。話をもちかけると『子どもは好きだから、来てくれるなら嬉しい』と返事をいただいたんです」

そうして平成17年10月に地域交流サロン「ばあちゃんち」がオープン。応援団や親子で襖や障子を張り替え、納屋はかまどでごはんが炊ける台所に改装された。

夫に先立たれた後、介護疲れから体調を崩して入退院をくり返していたフジエさんも、子どもたちや地域の人が集まるようになると、見違えるほどに元気になった。

「ばあちゃんち」は植木町地域子育て支援センターと2つの保育園が共同で運営。フジエさんは月5万円の利用料が支払われ、祝日を除く毎日9時30分～15時、セン

流サロン「ばあちゃんち」がオーナー。応援団や親子で襖や障子を張り替え、納屋はかまどでごはんが炊ける台所に改装された。

夫に先立たれた後、介護疲れから体調を崩して入退院をくり返していたフジエさんも、子どもたちや地域の人が集まるようになると、見違えるほどに元気になった。

「ばあちゃんち」は植木町地域子育て支援センターと2つの保育園が共同で運営。フジエさんは月5万円の利用料が支払われ、祝日を除く毎日9時30分～15時、セン

に生かしきるか、おいしく食べるかの知恵も伝えたいから。若いお母さんも、ここでなら親子で料理が習える。それだけでなく、野菜を買って帰って、家でも料理をつくることが家庭円満にもつながります」と、平山さん。そうした子育て支援効果からか、植木町の出生率は、平成19年から20年にかけて、20%近く上がっている。

子どもたちが、自分でつくったまんじゅうを手に母屋へ向かう。母屋では月に一度の子育てサロンが開催されていた。満面に笑みを浮かべて子どもたちを迎えるフジエさんははじめ、地域のおばあちゃんたち。子どもたちは、ばあちゃんたちの間に座り、みんなでまんじゅうをほおばっている。「この葉っぱは、何かわかるね？ ニッキよ。ニッキ水であるやろ」「昔はまんじゅうをつくつたら、神様、仏様にあげて、残りをみんなで食べよつたけど兄弟が多くて取り合ひだつたよ」

「こげんして、しゃべりよると昔の大家族ば思い出すですか」

ここは地域の大きな家。築100年のはばあちゃんちは、その記憶を次の世代へつないでいる。